

はじめに、本庁舎等整備の有識者会議関連経費についてお尋ねします。

第1に、2月の庁舎特別委員会で、新年度予算に今年度6回開かれる耐震性能分科会に安井設計・山下設計それぞれから2名参加する費用が含まれているとの説明がありました。2事業者の参加に係る予算提案は、市からの要請、それとも有識者会議からの提案でしょうか。また、参加の目的は何でしょうか。

第2に、有識者会議は、耐震性能について「2度の耐震性能調査」と「疑問を呈した専門家等からの意見」の両方を客観的・専門的に検証すると諮問書に記載されています。「疑問を呈した専門家等からの意見」の検証は、どのように行われるのでしょうか。「2度の耐震性能評価」では、設計会社の説明が聞かれており、公平な検証となるよう「疑問を呈した専門家の意見」検証でも、当事者の意見を聴取すべきではないでしょうか。

第3に、2021年度有識者会議関連経費800万円が計上され、有識者会議1回、耐震性能分科会2回が開かれる見通しです。有識者会議は、予算執行の結果として議事録等が公表されています。耐震性能分科会も予算執行の結果として、年度末時点で会議録等、何らかの開催記録を公表すべきではないでしょうか。

第4に、「こんなに重要な問題の議論が、なぜ非公開なのか？」という市民の声にどう応えられますか。

以上4点、市長に伺います。

(答弁)

市長に伺います。耐震性能分科会への設計会社の参加は、市の判断で予算化し、一方で疑問を呈した専門家の意見の検証は有識者に判断を任せるとするのは、市として公平さを欠いた扱いだと思えますが、いかがでしょうか。

(答弁)

どのように言われても、公平とは言えません。

分科会の報告では、自治体は年度ごとに予算を組み、事業を実施します。年度末の報告は行うべきです。また、分科会の非公開に市民は納得していません。今後公開されるよう強く要望致します。

続いて、有識者会議における財政面の検証です。

第1に、この度公表された「財政の中期見通し」建替え案での投資的経費における各年度の整備費用、2027年度以降の各年度の整備費用見通しをお示しください。中期財政見通しの投資的経費における庁舎建替費ならびに大規模改修費の総額、また、建替えと大規模改修、それぞれの総事業費をご説明ください。

合わせて、直近で一番大きな借金借入れの熊本城ホールに係る公債費総額と、年間の元利償還額、返済期間をご説明ください。

第2に、中期財政見通しでは、建替の場合でも、収支はほぼ均衡し、赤字となっていない。違いは、建替えは事業費が約2倍かかり、市債借入れが約200億円多くなりませぬ。その影響をどう考えられますか。

第3に、市庁舎整備は、「財政の中期見通し」の期間だけに止まりませぬ。償還期間約20年の市債返還の見通しも含めて検証するには、投資的経費とその内10億円以上のもの内容・金額や公債費、歳入における市債額などを長期的に見通した資料を作成し検討材料にすることが必要と考えますが、いかがでしょうか。

市長ならびに財政局長に伺います。

(答弁)

答弁された必要な関係資料に長期的見通しの資料は含まれますか。つくって示されますか。

2

(答弁)

また市長は、建替えの場合200億円も借金が多くなることに、「収支は黒字または収支均衡の見込み」と答弁されましたが、過大な投資を多額の借金で帳尻を合わせているだけです。老朽化した公共施設・インフラの長寿命化もあり、今回の財政見通しから毎年30億円投資的経費が増額されています。しかも、熊本城ホールの公債費216億円は返済が始まったばかりです。公債費や投資的経費は、過去に例を見ないくらい膨れ上がっています。これを市長は収支均衡と言われるのでしょうか。

(答弁)

過大な投資に借金を重ねることが、深刻な財政悪化・借金財政を招きます。過去100億だった財政調整基金は37億しかなく、積み増す予定もありません。一般の市町村より少ない財政調整基金を1億円も増やせないのに、200億円も多い借金を「収支均衡」だとのんびり構える感覚が、財政破綻を招いてしまう点を指摘しておきます。

2番目に、中心市街地まちづくり推進経費の第4期中心市街地活性化基本計画策定についてお尋ねいたします。

第1に、コロナ禍の特別な要因はありますが、中心商店街の地区別通行量の現状と、そこから見える回遊性の状況についての評価を伺います。

第2に、中心商店街の空き店舗の状況、ならびに桜町再開発ビルにおける店舗の撤退状況をお示しください。

第3に、サクラマチビルでは、今月末でホテルトラスティプレミアが営業を終了します。ホテル事業がどのように継続されていくのか、空白期間があるのかなど、ご説明ください。また熊本市は、営業終了の情報をいつ、どのような形で知ったのでしょうか。撤退の要因をどのようにお考えでしょうか。さらに、熊本城ホールとの関係では、宿泊・バンケット機能は重要ですが、この点はいかがでしょうか。

第4に、中心市街地の中核である通町筋・桜町周辺地区では、2核3モールそれぞれの賑わいと回遊性が重要です。4期計画では、回遊性の検証を目標とすべきではないでしょうか。

第5に、環境に配慮した中心市街地のまちづくりの現状と、今後の取り組みについてお聞かせください。

市長ならびに経済観光局長に伺います。

(答弁)

答弁では、コロナ禍とはいえ、通行量が減り、空き店舗が増えています。通行量では、上通・下通・新市街エリアと比べ、桜町周辺エリアではさらに半分以下です。「桜町再開発開業で、回遊性向上に効果があった」と言われますが、街なか広場であれほどイベントを行いこの状況なので、「効果あり」とは言い難く、2核3モールの賑わいと回遊性では、掘り下げた検証が必要です。

また、開業してわずか2年の桜町再開発では10数件の空き区画があり、しかも再開発ビルの大きな部分を占めるホテルトラスティプレミアが早々に撤退、今後一般向けホテルから「会員制」を軸とした事業展開へ移行とのことです。これは桜町での一般向けホテル事業が難しいことを示しているのではないのでしょうか。市長は「次の事業者が早期に再開すれば影響は少ない」と答弁されましたが、安易に構えている状況ではないと思います。もともと再開発への商業等店舗誘致は苦戦しながら進められました。そういう中で店舗・ホテルの相次ぐ撤退は、今後の事業展開の厳しさを示しています。熊本城ホールへのMICE誘致にホテルの存在が重要なことはもちろん、450億円も税金を投入した桜町再開発という大事業の成否に熊本市は大きな責任を負っていることを肝に銘じるべきです。

また、今後のまちづくりには環境の視点が欠かせません。答弁では、環境に配慮した中心市街地のまちづくりで縷々述べられました。現在の気候危機・温暖化の問題は、開発優先で自然を壊してきたからでもあります。巨大な再開発ビル整備や広場を石で埋め尽くし、さらに人工芝で覆い、イベントで人を呼ぶ、このようなまちづくりが環境にやさしく持続可能でしょうか。ヨーロッパなどでは、人の集まる旧市街の古い街が賑わいの中心で、開発と無縁です。第4期計画策定では、熊本の顔となる中心市街地、デジタルトランスフォーメーションというよりも、歴史と自然あふれ、誰もが集える市民の憩いの空間としてのまちづくりをお願いして、質疑と致します。